

苫前町における吹雪を活用した「まちおこし」のころみ

苫米地 司 (北海道工業大学)

1. はじめに

過疎化の進む市町村では、地域の活性化を目指した「まちおこし」が積極的に行われている。この「まちおこし」は、それぞれの地域における計画資源を活用するケースが多い。計画資源には、自然の景観、特産物、気象などがある。自然の景観による「まちおこし」は観光的な要素、特産物による「まちおこし」は加工技術、気象による「まちおこし」は季節限定等とそれぞれの特性を持ち合わせている。本稿で取り上げる苫前町は冬の気象条件を計画資源とした「まちおこし」に取り組んでいる。その状況を報告する。

2. 苫前町の概要

苫前町は北海道の北西部である留萌支庁管内の中央部に位置し、日本海オロロンラインを形成している。主な産業はホタテやたこを主とした漁業とメロンを主とした農業である。人口は図1に示すように、ニシン漁で栄えた1950(昭和30年代)年代の12000人をピークに、その後減り続け、現在では5000人を割る過疎の町である。気象条件は、図2に示すように10月から3月まで風が強く、5月から9月にかけて比較的風が弱いことに大きな特徴がある。

3. 苫前町における「まちおこし」

苫前町の計画資源は、海、夕日、風といった自然である。海の活用は、1996年に白い砂を敷き詰めた「ホワイトビーチ」の開設である。7月から8月にかけて50000人以上の海水浴客が訪れる。夕日の活用は、ホワイトビーチと同時に開設した「夕陽丘オートキャンプ場」である。5月から10月にかけて10000人以上の愛好者が訪れる。こうした夏を中心とした「まちおこし」は、役場の若い職員を中心として始まり、今では多くの



図1 苫前町の人口推移

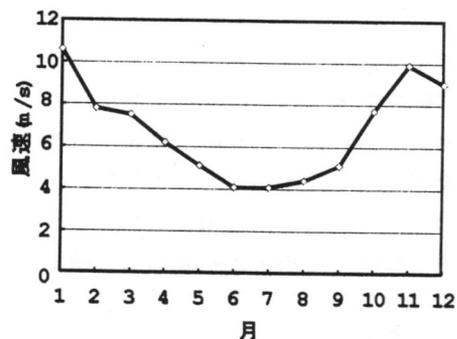


図2 苫前町の月平均風速

町民を巻き込んだ活動に至っている。しかし、冬における「まちおこし」に関わる行事といえば、冬場の強い風を生かした凧上げ大会や冬まつり等の単発的なものがあるだけである。町内の関係者にヒアリングをすると、「冬は吹雪で何もすることができない。冬は休むものである。」といった答えが返ってくる。

こうした中で、「まちおこし」の拠点となる施設を造る計画が持ち上がった。これらの公共施設の設計は、競技設計方式かプロポーザル方式によって設計者が選定されるのが一般的である。しかし、このような方法で建設された公共建築物はシンボリックではあるものの、地域らしさを十分に取込んだ建物になっているか疑問も多く残る。「地域らしさ」を取込んだ公共建築にするためには、少なくとも基本計画に多くの地元在住者の参加が必要である。苫前町では、この考え方に基づいて競技設計方式でもなく、プロポーザル方式でもなく、多くの地元在住者を巻き込んだ委員会方式を採用した。この委員会の下部組織として、施設計画を担当する建設ワーキングと運営計画を担当するソフトワーキングとが設置された。それぞれのワーキングで一年を通じた町の活性化を支援する施設はどうあるべきかを真剣に議論した。その議論の中で、以下のような意見があった。

- 1) 春から秋にかけては、計画資源である海（ホワイトビーチ）、夕日（夕陽丘オートキャンプ場）が有効に活用され、町の活性化に寄与している。主産業である漁業や農業の活動もこの時期に集中している。
- 2) 冬になると、吹雪による交通傷害も多く、町を訪れる人も極端に減少する。ただじっとして、春を待つだけである。一年を通じた町の活性化のためには吹雪の冬をどうするかが課題である。

こうした議論の中で、吹雪を積極的に取り入れて施設計画を進めようということになった。積極的に吹雪を取り込むことになると、以下に示す多くのアイデアが出された。

- 1) 吹雪で発生する吹きだまりや着雪を自然が創り出す造形として考え、計画地に隣接するオートキャンプ場を巨大なキャンパスとして美術を専攻する学生に開放できないか。
- 2) 人工的に大きな吹きだまりを形成し、エネルギーとして活用できないか。
- 3) 建物の中庭に吹きだまり庭園ができないか。
- 4) 吹雪を体験する雪中キャンプができないか。
- 5) 吹雪の研究者が集まるような施設ができないか。

今、これらのアイデアを実現すべく、建設ワーキングで施設の計画が進められている。これらの作業は、役場内の若手職員、町内のまちおこしグループがボランティアで参加し、設計者を交えて数百時間にも及んだ。何ともエネルギーで、吹雪によるまちおこしが成功することを確信できる。こうした一連の動きの中で、これから町を支える役場内の若手職員や若い町民の方々が真剣に「苫前」を考えたことが、何事にも代え難い町の大きな財産になったと考える。これが本当の「まちおこし」なのではないかとも考える。